

machi-no
ne

まちのね

issue 4
summer, 2025

特集

「まち」は つづいていく



卒園児と園の関係性



こえをきく

虫へのまなざし まちの保育園 六本木

まちの研究所の共創プロジェクト

リゾナーレ大阪のアトリエ

今と未来を考える

父親育児の現在地 理想・現実・ホンネ

特集

「まち」は つづいていく

卒園児と園の関係性

まちの保育園・こども園の一園目、「まちの保育園 小竹向原」が2011年に開園してから丸14年が経ちました。卒園児たちは小学校、中学校、高校、大学へと広がっています。まちの保育園・こども園では、園が卒園児にとっても、ご家族にとっても、ほっとできる居場所であり続けられたいと思っています。

各園で、日常的に卒園児が園に立ち寄り、関わり続ける光景がみられ、それは、在園児や地域にとっても良い影響があると考えています。

作戦会議

1回目



10周年を迎え、記念イベントを企画するにあたり「吉祥寺園らしく、こどもたちのやりたいことをやりたいね」ということで、卒園児たちと作戦会議を行うことに。

ひさしぶりの顔ぶれに、懐かしい感情となんか安心する気持ち。早速、グループに分かれて意見を出しあいました。

それぞれの年齢で、出てくるアイデアもさまざま。見ているだけで、もうワクワクします。

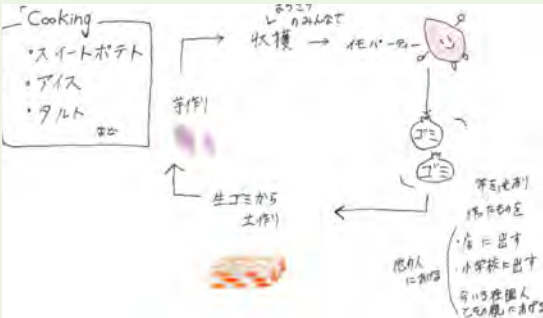


出てきたアイデアをまとめるために、最年長の中学1年生グループがリーダーになってくれました。10年前、吉祥寺園の開園時にはねっこ組(2歳児クラス)だった子たちです。大きくなくても保育園に来てくれたことに感動するとともに、何度か集まって会議を重ねるなかで、やっぱりこの子たちはすごい!と誇らしい気持ちになりました。

中学生チームは、幼児室に貼ってある、在園児が描いたまちの地図を見て「そういえば、ここ行ったねー」「あーっ覚えている覚えている!」「それで、焼き芋食べたよね!(園の薪ストーブで焼いた)」「食べた食べた!」「帰りが遅くなってもう芋がないかと心配したらCC(園のコミュニティコーディネーター)が残しておいてくれたんだよー」「屋上で野菜作ったよね」「菌ちゃんだ!」「生ごみから土作り!」みんなと話していると、思い出の断片がつかまって、当時のエピソードが溢れてきます。

屋上を見たい!という中学生ふたり。「ここで虫踏んじゃったよねー」「えーよく覚えているね」「なんか畑が小さく感じるなあ」

そんな話をしているうち、「焼き芋しよう!」「焼き芋パーティだ!」「焼き芋でケーキ作りたいな」「それでまた芋のごみで土作りをして芋を植えたらまたお芋ができて、来年も食べられるよ」



「無限に焼き芋ができるよ」「近くの小学校にも配れるんじゃない?」「先生たちも行事考えなくていいから楽だよ」次々とイメージが膨らんでいきました。

作戦会議

2回目



前回集まったメンバーが、「スペシャルゲストを呼ぶからね」とLINEで何やらやりとりを始め、新たなメンバーが2人加わりました。懐かしい嬉しさと、恥ずかしい気持ちが入り混ざったような2人の様子。

「何しに来たかわかってんの?」「もーぶざけないでちゃんと考えてよ!」なんて言われながらも、企画を考えてくれました。

先日の焼き芋パーティに加え、新たに出た案が「植樹」でした。生ごみから循環できる仕組みや、身近に自然があることの良さを知っているからこそ、出てきたアイデアなのではと感じました。

「焼き芋パーティー開催」「記念樹を植える」2つの計画を進めるうち、予算が心配になったみんな。以前、小学校の環境委員になり、校長先生から予算を取ったという経験のあるメンバーから、「直接、代表にプレゼンしてみよう!」という提案が。



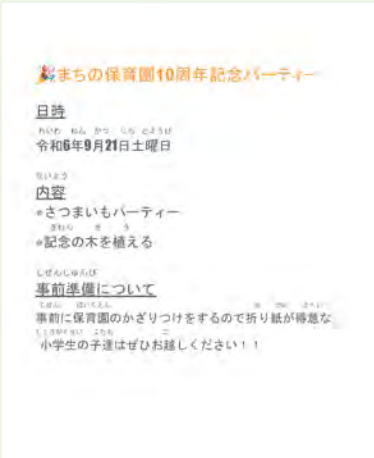
プレゼンを終え、「約束してほしい。園の近くに来たら記念樹を見に来てね」「はい!」と握手をして交渉成立!

無事、予算がいただけたのでした。(椅子を出したり、お茶菓子を用意して接待も欠かしませんでした)

「芋っぱい太い字」で書いた、看板の題字とともに。



「チラシも必要じゃない?」Googleドキュメントを使い、ササッと作ってくれました。



各園での卒園児との「つづき」の話

まちの保育園 小竹向原

「まちのなつやすみ」という夏休み期間中の受け入れや、「まちのおてつだい」といった放課後の居場所としての継続的な受け入れを行っています。

まちの保育園 六本木

併設するカフェ「まちの本とサンドイッチ」に卒園児がふらりと顔を出す姿が日常としてあり、ボランティアとしてお手伝いをする姿もみられます。

まちのこども園 代々木上原

放課後に毎日のように卒園児が訪れ、宿題をしたり、保護者の方と待ち合わせしたり、ゆったりと園で過ごしています。

まちのこども園 代々木公園

長期休み中に園に来て、給食と一緒に食べたり、先生体験をしたり、園庭整備を手伝ってくれたり、第三の居場所としての役割が育まれています。

南青山園は2024年開園のため、まだ卒園児がおりません。これからのつながりが楽しみです!

どの木をえらぼうか?

学校、部活に習い事で大忙しの中、土曜日なら集まれるよ!とやる気満々の中1メンバー3名。

ねっこ組の時から植物が大好きなAくん。当時と変わらず目をキラキラ輝かせながら「植樹」について話し合いました。

どんな木がいいかな? 「常緑樹がいいんじゃないか」「落葉樹だとみんなが遊べるよ」「あー遊んだよね」「先生の掃除大変だけだね」「耐寒性や育てやすさ、あとは見た目もかわいいかどうか、で候補をあげてきました。かわいい花を見て盛り上がるAくんたち。すぐに絵を描いてくれる1ちゃん。Aくんが表にまとめてくれました。

植物名	耐寒性	花の咲く時期	育てやすさ
ユリカキランナウ	強い	9月-12月	かんたんに強い
常緑赤十字草	強い	5月	かんたんに強い
カルフォルニアライラック	強い	5月	かんたんに強い
常緑赤十字草	強い	5月	かんたんに強い
ソコゴ	強い	5月	かんたんに強い
サルスベリ	強い	7月-10月	かんたんに強い

「いい事思いついた!木の周りに花を植えたら小さい子でも楽しめるんじゃないかな?」またまたアイデアが膨らんでいきます。どれを植えるかは、造園家の古賀さん(卒園児のパパ)に後日相談してみることにしました。



ご多忙な古賀さんと、文化祭実行委員でバタバタなAくんの予定をなんとか合わせ、園で「植樹」についての話し合いを行いました。園庭の現状、育てやすさなどを配慮し、「サルスベリ」に決定!

みみずが土を良くする

植樹をする園庭を見て「土が良くないといけないね」という話に。Yくんが「みみずを放てば土を良くしてくれる!井之頭小学校(吉祥寺園のすぐ近く、Yくんの母校)のビオトープにうじゃうじゃいるよ。環境委員だったから育ててた!」

校長先生にお願いして、夏休みのビオトープにお邪魔しました。Yくんの弟のKくん、お母様も来てくださり、園長先生とひたすら土を掘ってみみずを捕まえました。



せっかくなので、園の子どもたちにみみずのことを説明してもらいました。「やさしく触ってね。水をたまに入れて。入れすぎると溺れちゃうからね」

ケーキはダンボールで!

「焼き芋でケーキを作りたいな」園の栄養士の先生に尋ねたところ、どうやら実現が難しそうです。そこで、園にある素材を使ってケーキの形を表現することに!

1回目の作戦会議のときメンバーが描いていたケーキの絵をヒントに、「10周年だから10段のケーキにしよう!」「飾りも付けようよ」園にあった輪重ねの玩具からも着想を得て、「これを倍にしたら綺麗なケーキができるかも」黄金比を導き出していました。



「あー楽しくなってきた!」形にしていこうと楽しんでいるみんな。

「僕のお父さんのお店にダンボールや梱包のやつがたくさんあるよ!持ってきてもらおう!」とYくん。その場で電話してくれて、10分後にはお父様が車で運んでてくれました。



「ダンボール切るから、線引いてよ」「わかった!」コンパスがないからと、キリと紐で手作りコンパスを作ったり、手際良く楽しそうに進めていきました。



3人それぞれが、得意なことを発揮しながら進めていく姿に、保育園時代と変わらないこのクラスの良さを思い出しました。

燃え尽きすぎて、テンションがおかしくなるほど楽しそうな3人!しかし時間が足りず、残りは園の職員たちが引き継いで完成させる事にしました。

そして、いよいよ当日。。。!



思い出の写真がたくさん飾られた園内。園の薪ストーブを使った焼き芋パーティ。園内スタンプラリーをして盛り上がり、ケーキは「みんなでつくるケーキ」として、木の実(園のお散歩先でこつこつ集めたもの)や、ロスフラワーなど(近隣のお花屋さんにいただいた)を用意し、参加者が好きなものを選んでデコレーションしました。

みんなの意見を整理して実現できたこと、一人ひとりの経験が自信となっていること、それを発揮できる・自分の意見を聞いてもらえる仲間がいること、何よりたのしいうこと。「もし家出したらこへ来よう」なんて声もあって、社会の中の保育園という場の役割を改めて考えさせられました。いつでもウエルカム。いつでもほっとできる。思い出が詰まっている場所。吉祥寺園は、これからもここにあり続けなければ!と強く思いました。

こえをきく

こどもたちの学びの物語り

虫へのまなざし

— 観察と表現 —

まちの保育園 六本木 4・5歳児

六本木園では、園全体で「自然と和」をテーマに、こどもたちの興味や問いを出発点としながら、都会ならではのグリーンとの関わりや、伝統行事・日本文化との出会い、地域コミュニティとのつながりを育んでいます。

今回ご紹介するのは、「自然の形に耳を傾ける」こどもたちの姿と、そこから広がった発見や物語です（対象：4・5歳児 かぜ組・だい組）。

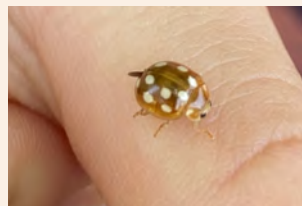
特に焦点を当てたのは、園の目の前に広がる[けやき広場]で出会った虫たちとの関わり。はじめは「近くで見たい」「捕まえたい」といった自分中心の関心からスタートしましたが、やがてダンゴムシやてんとう虫などの“パートナー”たちの気持ちや特性、生き方に目を向けるようになっていきました。

そのプロセスには、こどもたちの視点の変化と豊かな想像力が見てとれます。

であう、問いが生まれる



大きな木の周りに、たくさんの虫を発見。Hさんは長い枝を使い、高いところにある溝にも何かいるのでは？と突いてみる。Kさんは遠ざかって広い視野で見ながら、どこに虫がいるかを指差しで伝える。



「どんな葉っぱが好きかな？」

「木の下に生えている草にくっついてる黄色いものは卵かな？」

「てんとう虫はなにを食べるの？」

観察する、発見する



「2つしか点がない！」

けやき広場でみんなで協力して見つけたてんとう虫。よく観察するために、少しの間クラスルームに招待しました。デジタルマイクロスコープ（顕微鏡）で見ると、斑点の数が少ないことを発見！



朝読んだてんとう虫の本を思い出して、もう一度開いてみます。

「あっ、これじゃん！」

背中の斑点が2つある、ナミテントウと照らし合わせます。ナミテントウの実物と、本の中のてんとう虫を見れば見るほど、斑点はそれぞれの種類を見分けるヒントになることに気づきました。実は観察の前には、「てんとう虫の点の数が歳の数なんだよ」と言っていた子もいました。



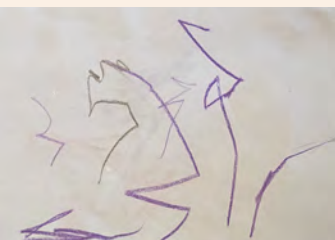
てんとう虫はレンズの前からいなくなったり、戻ってきたり。しばらく観察していると、その角度によって、足の数がわかったり、触角と足を見分けたことができたり、肉眼では見えづらい部分も見ることができました。



「足は6本」



「足は2、2、2ってあるんだよ（体を囲むように）」



（右2本は）「触角」（左は）「体の部分」

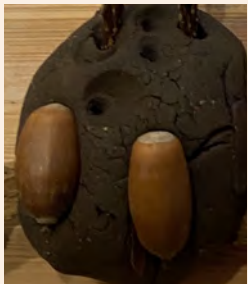
表現する

さらに、土粘土を使ってアイディアの展開が続きます。紙に描いた子どもたちの発見は、どのように土粘土で表現されるのでしょうか？

「形はどう作ろう？」

「触角は長いものがあるね。」

「斑点は何でつくろうか？」



指で潰した部分をなぞっていくと、しましまの模様になったり、どんぐりを粘土の表面に載せるとナミテントウの斑点みたい。触角は、枝を好きな長さに折って突き刺してみる。



てんとう虫の本には、「てんとう虫のいろいろ」というページがありました。

園のアトリエでも、一匹のナミテントウから広がって様々な視点や発見が豊かに表現されました。

さらなる問い

「逃がしたてんとう虫はどこへ行くのかな？」

「どうしてナミテントウはけやき広場にいたの？どこから来たのだろう？」

「木や葉っぱなどの自然は、虫たちの生活にどのような役割があるのかな？」

こどもたちと一緒に活動する、保育者やアトリエスタからもさまざまな問いが膨らみます。

保育者のこえ

あらたな出会い



この日出会ったのは、ミミズ。

「土と葉っぱで気持ちよくしてあげよう」

手のひらの上のミミズが、心地よく過ごせるように工夫します。



さらに、てんとう虫の幼虫も葉っぱの上で育っている様子を見つけました。

前回生まれた、葉っぱや木の役割についての問いを深める気づきとなりました。

「ミミズをもっと動きやすいところに移動しよう！」

Rさんの一言で、近くにあったベンチの日陰にそっとミミズを置きます。



「のびてる！」

「ちちんでる！」

「うわっ、まるくなった！」

ミミズは伸びたり、縮んだり、丸くなったり……。こどもたちの好奇心に応え、ダンスしているかのように見えるほど。かぜ組の子どもたちはミミズを囲み、その動きを楽しむかのように大きな笑顔で、拡大鏡を使って覗きます。

ミミズと子どもたちの相互関係が観察できた瞬間でした。

虫の気持ちを考える



「お、重たいよ……」

広場で出会ったダンゴムシ三匹。

デジタルマイクロスコープをつないだモニターで観察していたとき、こどもたちが、ダンゴムシたちの動きに合わせて、ムシたちがそれぞれ今何を思っているのか、感じているのか。ボイスオーバーでナレーションをしていました。

「きみたち何をしているんだ」

「ちょっとどいてよ～、前に行きたいんだよ。」

おわりに



毎日遊ぶ広場や公園でも、その日の子どもたちの気持ちや好奇心、友達や大人との関わりによって、出会いや遊びの展開は少しずつ違ってきます。

“Less is more（少ないほど豊かである）”という言葉があるように、出来事があふれる日々の中でほんの一場面に目を向けると、そこには多様な表現や、心を動かす物語がたくさん実っていることに気づきます。

今回の「虫」をテーマにした活動でも、虫との出会いをきっかけに、こどもたちの関係性が深まり、それぞれの役割を見つけながらチームで協力する姿が見られました。また、じっくり観察することで生まれた新たなアイディアや問い、虫の気持ちや生き方にまで思いを巡らせるようになる姿も印象的です。

こどもたちのまなざしを通して見る、六本木の生き物たちの世界。その変化に、私たちもワクワクしながら耳を傾けていきたいと思います。

共創プロジェクト



まちの研究所

VOL.4

リゾナーレ大阪

2022年冬に開業した、大阪・南港エリアに位置するホテル「リゾナーレ大阪」。

その最上階(28F)に誕生したのが、日本最大級のアトリエ。星野リゾートとまちの研究所が協働で運営を行なっています。

リゾナーレ大阪

大阪府大阪市住之江区南港北1丁目13-11
●JR大阪駅より無料シャトルバスで約25分

アトリエ利用時間／13:00～18:15、翌9:00～12:00
対象年齢／0歳～12歳 プロジェクト(予約制)／3～12歳



「教わる」ではなく「出会う」場所



大阪湾を望むガラス張りの開放的な空間で、こどもたちが自然や季節と出会い、自由に表現を楽しめる場所。レッジョ・エミリア・アプローチにインスパイアされた本アトリエの大きな特徴は、何かを「教える」のではなく、こどもが環境に「出会う」ことを大切にしている点です。さらに、創造活動の専門家である「アトリエリスタ」が常駐し、こどもたちの活動に寄り添います。



アトリエ内には、既成の玩具はありません。光、色、描くこと、造形や感触、自然物や人工物など、さまざまなマテリアル(素材)を用意。それらとの「出会い方」にも配慮したレイアウト、そこから生まれる多様な表現をさらに広げる／探究を深められる環境をととのえています。普段触れる機会の少ない、OHPやライトテーブル、デジタル顕微鏡などの電子ツールも準備し、こどもたちの興味や好奇心、創造力をかき立てます。

「ある日、土粘土を一生懸命ずっとこねていたお子さん。その隣で、お母さんがずっとこにこしながら見守っていました。『初めて触ったときは、土粘土が手につくのが嫌で泣いていたんです』。そうか、その子にとっては「触れていること」

そのものが、すごいことなんだと。ここで出会うまでのストーリー、背景があることを改めて感じるとともに、こんなに特別な、貴重な瞬間に立ち会えているんだ!という喜びがありました。

(アトリエリスタ)

地域や歴史に親しみを持てるように



この土地ならではの取り組みとして、周辺の企業に提供いただいた余剰素材や廃材をギャラリーに展示したり、マテリアルとして活用したり、地域の職人さんによる手仕事・匠の技が身近に感じられるような工夫も行なっています。昔ながらの製法で作られたお弁当箱を見立て遊びができる素材の置いてあるエリアに配置したり、染め物職人によるベンガラ染めのワークショップなど、空間や遊びのなかで、自然と出会えることを意識しています。また、大きな窓から見える広い空、海、港の風景。貨物、大きな船やトラック、カラフルな電車・ニュートラムなど、立地を活かしたこの景色も、創作の刺激となっています。

どんなお子さんでも楽しめる場所を目指して

リゾナーレ大阪の宿泊料金にアトリエの利用料も含まれているので、0～12歳のお子さんであれば追加料金などなく利用することができます。特に3歳以上のお子さんは「プロジェクト」といって、保護者と離れ、こどもたちだけ(最大8名まで同時参加)の1時間の探究プログラムに参加することができ、これを目がけていらっしゃる方も多くみられます。プロジェクト活動後には、写真付きの「ドキュメンテーションカード」のお渡しとともに、保護者の方へ15分ほどの振り返りをお伝えする時間を設けています。



あるとき、「うちの子は落ち着きがないから、1時間も持たないと思う」とプロジェクトへの参加を遠慮された保護者の方がいらっしゃいました。そのお子さんがアトリエで過ごしている姿を見ていたアトリエリスタが、その子の活動の様子とプロジェクトの内容を合わせた説明を、保護者の方にお伝えして参加していただきました。すると、そのお子さんは1時間じっくり集中して取り組んでおり、活動のなかでお話もたくさんしてくれました。その様子を書き留めて保護者の方に共有したところ、とても喜んでいただきました。

(マネージャー)

「人」も、環境の大事な要素

アトリエリスタ、アトリエスタッフは、そんなふうにもこどもたち一人ひとりの活動に寄り添う存在です。お子さんの様子を見ながら、「こんな出会いがあるともっと探究が深まりそう」だとか、その子の気づきやひらめき、ふとすると見落としてしまうような言動を拾って活動を広げていきます。お子さんのタイプや年齢によっては、保護者の方と一緒に過ごすほうが安心な場合もあるため、そのときは直接関わらず、保護者の方にそっと提案したりすることもあります。また、プロジェクトに参加する際のフォームに、スタッフに伝えておきたいことを保護者の方に書いていただく欄があります。スタッフはそれを事前に確認した上で、その子に合わせてサポートをするなど、臨機応変に対応しています。最近では、大阪万博が開催中ということもあり、海外のお客様も多くいらっしゃいます。基本は日本語対応のプロジェクトではありますが、英語が話せるスタッフもあり、可能なかぎり英語対応も行っています。

「うちの子にこんな一面があったんだ! 実はこういうことが好きなんだ、こんな物を使って遊べるんだ。という驚きや発見がありました」

「これ(素材や道具)ってどこで手に入りますか? せっかく集中しているの、家でも続きをさせてあげたくて」

「親自身も学びになる、いい機会となりました」
(利用された保護者の方から)

一期一会の場所だからこそ、はじめて出会ったこども同士の関係性、他の子と活動がつながり、協働する瞬間にスタッフ自身もいつもワクワクしています。

大人も「あたらしい視点」に出会える



そのほか、古楽器を使った楽団「ロバの音楽座」による夜の音楽会、パナソニック

の開発中のIoT照明機器を使った光のプロジェットの共同開催、吉本興業のアーティスト芸人さんがアーティストインレジデンスとして一定期間アトリエに滞在し、こどもたちと交流しながら作品づくりを行うなど、さまざまなゲスト企画やコラボレーションも行なっています。またホテル内には、ネット遊具や壁のキャンパスなどがある客室や、屋内外のプール、レストラン、スパやクラブラウンジ(予約制)など、大人も子どもも楽しめる施設がたくさん。館内で完結できますので、天候を気にせず、乳幼児連れの方にも安心してご利用いただけます。

こどもも大人も、ともに「気づき」や「新しい視点」に出会える空間。旅先だからこそ、日常から離れ、リラックスした空間で、感覚に集中できるのかもしれない。スタッフも日々、こどもたちの姿に刺激を受け、日常の感覚が研ぎ澄まされていくと語ります。アトリエは、滞在中何度でも利用できますので、お子さんのレジャーとしても、レッジョ・エミリア・アプローチに触れる場としても、ぜひ気軽に訪れていただけたら嬉しいです。

INFORMATION

NEWS

「まちのこども財団」 設立のお知らせ

公益財団法人まちのこども財団がスタートしました。(経緯などは、「まちのねのね」もご参照ください)財団では、9月8日より全国の園・施設が取り組む「探究的で創造性あふれる学びを支える環境づくり」を応援する「創造的探究助成金」の募集を開始します。また、9月9日には募集説明会を開催予定です。詳細は、近日中に当財団のホームページで公開予定です。



まちのこども財団
HP

HOME/WORK VILLAGE グランドオープン



まちの研究所運営のクリエイティブラーニングスクール「レンズ」が入居する、東京都世田谷区の旧池尻中学校の跡地を活用した新施設「HOME/WORK VILLAGE」(ホームワークヴィレッジ)が7月24日にグランドオープンを迎えました! レンズでは引き続きスクール生を募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。



HOME
WORK
VILLAGE
HP



レンズ
HP

EVENT

保育園ミドルマネジメント層向け トークイベントを行います

まちの保育園・こども園では、主任・副主任・副園長・クラスリーダーなど、現場を支える皆さんとともに「よりよい園づくり・組織づくり」を考えるセミナーを開催します。前半は、理念の浸透や職員の学びの仕組みづくり、小グループ活動の工夫など、私たちの園での実践をご紹介します。後半は、参加者同士が語り合い、自園に持ち帰れるアイデアを探す時間です。日々の悩みや工夫を分かち合いながら、これからの保育や園のあり方を一緒に考えませんか? 代表の松本も登壇予定です。皆さまのご参加をお待ちしています! (申込締切:8月24日)

8月26日(火) 19時～21時
まちのこども園 代々木公園

現地 / オンライン 同時開催



「coの夏をたのしもう」開催中!



渋谷区神南ネウボラ子育て支援センター「coしぶや」では、9月1日まで、こどももおとなも楽しめる、ちょっと特別な企画が盛りだくさんの「coの夏をたのしもう」を開催中です。詳しくはcoしぶやインスタグラムをご覧ください。



Instagram

あとがき

「まちのね」第四号、最後までお読みいただきありがとうございます。保育園・こども園を卒園したあと、こどもたちはそれぞれの場所で、さまざまな出会いがあるでしょう。そんなとき、ふと立ち止まったり、帰ってこられる場のひとつとして、園があり続けられたらいいなと思うのと同時に、その先もサポートできるようなかたちをこれからも模索し、文化を耕し続けていきたいと思います。まちのコミュニティに出会ってくださった皆さんに、改めて大きな感謝を。本誌にご協力いただいたみなさまも、ありがとうございました!

●「まちのね」をうちに置いてもいいよ! という方がおられましたら、ぜひご連絡ください。

本誌に関するお問い合わせ: press@machihoiku.jp